

華薩摩 空女・小野多美枝 作品展

超絶技巧・現代に甦る
8月26日～9月7日

彩遊の号 No.10

愛海詩の会

会報

平成26年8月21日発行

編集発行人／ギャラリー愛海詩

佐藤 瞳子

〒064-0821

札幌市中央区北1条西28丁目2番17号

TEL・FAX／(011)613-1112

WEBSITE

http://www.emishi-s.com

E-mail:kougei@emishi-s.com



創作中の空女・小野多美枝氏

手中の玉 「華薩摩」

この仕事をしていく、出合いの大切さは言うまでもありません。玉のようないことなのです。人との出合いは、人と人、人と作品との「はじ渡り役」の私には紛れもなく尊いことなのです。

しかし、人は玉のような所と、瓦礫のような所を合わせ持つものであると、人は留まらない、変化するものだということを思えば、多方面からの理解が必要な方も多いらしく思います。人は人によって傷つき、落としめられることがあります。人がよって救われ、勇気をいたします。だから余計に自分が大切なのです。私はこの仕事を通して、勇気と希望をいたすことがあります。出合いが大切なのです。私はこの仕事を通して、勇気と希望をいたすことがあります。出合いを通して学ぶことは良きにしろ、悪しきにしろ、どちらかが大切なのです。私はこの仕事を通して、勇気と希望をいたすことがあります。出合いは自分を写す鏡になります。

これが、空女さんとの出合いの鮮烈です。「佐藤さん、素晴らしい作家を見つけましたよ。」徳川家康様はギャラリーにいらすぐに、メモ帳と一緒に「華薩摩」と書かれました。その日、私は作品の写真を見て、度肝を抜かれてしまつたのです。いつかこの作家にお目にかかりたい、と思ったのは平成二十三年の初冬で、翌年の春、徳川様の「華薩摩・空女さん取材」にて一緒に感心していました。空女さんは明るく、包容力があり、大胆にして細心振りいで、空女さんとの出合いです。

初対面、空女さんとお目にかかるまで、メモ帳と一緒に「華薩摩」と書いていました。空女さんは何處にいらっしゃるのだろう?と思つたほど、想い描いた人は違っていたのです。しかし、空女さんは明るく、包容力があり、大胆にして細心振りいで、空女さんとの出合いは鮮烈です。帰りの車の中で私は、宝物を見つけていた子供のように心が踊り、楽しくなったのです。

「華薩摩・空女さん」北海道で初めての作品展です。香炉、抹茶器、香合、飾物、盃など、約五十点を展示します。空女さんの作品を、これだけ一同に見らることはなかなかございません。伝統的な模様を使いつつ、現代に通じるデザインで、涼とした品格を醸し出す。瓔珞の流れるような線の動きと地文様の線の静けさが互いに呼応している。細部に至るまでの心配りの仕事振りには、妥協を許さぬ作家の矜持を見る思いです。全て、金は二十四k。銀色の部分はブランチナを使用しています。この超絶技巧の数々、多くの方々に実物を近くで見ていただきたいと思います。

お話を聞くと、空女さんの陶芸の道は、けっして順風満帆ではなかったようです。未踏の道を暗中模索、手づくりで、懸命に辿つて来た道であるのです。寝ても覚めても「華薩摩」のことを考えていました。今回、作品を一つずつ、色を見せてきます。今回の作品では、オリジナル作品もデビューします。全く、金は二十四k。

銀色の部分はブランチナを使用しています。この超絶技巧の数々、多くの方々に実物を近くで見ていただきたいと思います。空女さんは言います。今は自然体で仕事を進むことが、最も美しいです。でも前に進むと、うれしくて…と空女さんは言います。今は自分で作つて行きながら、残る仕事を続けていたいのです。空女さんは、これまでに進んで、進化していくのです。長く続けて来た仕事は、「華薩摩」として、正に独自の華を開花させようとしているのです。

「今後も直感で考えたことを大切にして、進化して行きたい。楽しみながら、残る仕事を続けていたい。」と未来に目を向けています。空女さんは、京都後輩の竹のようにならなくて済みます。苦勞や悲しみや辛さは自分の内に仕舞つて、あるいは仕事で昇華して、内なるものも含めて作品を通して見る者に語りかけます。何よりも、その作品が空女さん自身を如実に語っているのです。空女さんの作品は美術品とされるところ、その出合いをみなさんと共に分かち合いたく思います。(佐藤瞳子)

ご挨拶 ~作品展によせて~ 空女・小野多美枝

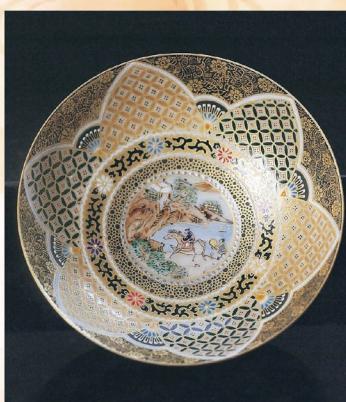
札幌のみなさま、こんにちは。

昨年の「目の眼」の取材時に徳川家康様のご縁で、この度初めて北海道、工芸愛海詩さまにて展示会をさせて頂く事になりました。私はまだ足を踏み入れたことのない北海道、空女作品が一足先に参ります。

京都の夏は暑く、北海道に行く作品達を羨ましく思っております。

一品一品デザインを変え、手描きで制作をしております為、京都においても実物を御覧頂く機会が少なくなっています。是非皆様に一期一会の機会を楽しんで頂けますことを思い、幸いでございます。

どうぞ高覧下さいませ。



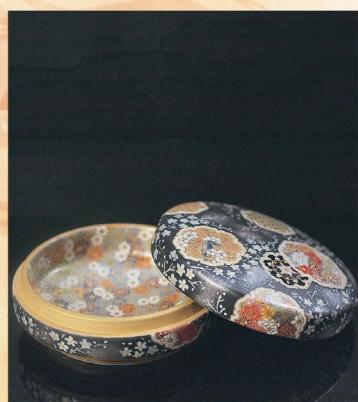
山水盃 直径72mm×高さ31mm

描いたデザインのバランスに感嘆する。このような盃で、おいしいお酒を飲めば、時は豊かに流れに違いない。ユーモラスな山水画と精緻な模様の広がりが技の巧みを伺わせ、作品を際だたせています。口ざわりもすばらしく、目にも美しい。



瓔珞縁子香炉 直径88mm×高さ87mm

色形、デザイン、と共に申し分なし。金彩をふんだんに用いた繊密な表現が、ただそこにあるだけで、涼とした品格を醸し出す。瓔珞の流れるような線の動きと地文様の線の静けさが互いに呼応している。細部に至るまでの心配りの仕事振りには、妥協を許さぬ作家の矜持を見る思いです。



香合・黒地雪輪花鳥紋 直径84mm×高さ37mm

美しい香合である。あまねく人々の心を魅了するに違いない。微妙な色使いの素晴らしさ、筆の運びの繊密さに、つい心が踊る。花詰めの内側には目を引く。蓋をして眺める時、開けた時の驚き、その時々を豊かに彩る優美な香合である。



藤牡丹扁壺 周79mm×高さ105mm

どちらが裏か表かということだが、この写真的反対側には牡丹の美しい絵がたおやかに描かれている。まったく違う絵を楽しめるということだ。小鳥のさえずりが聞こえて来るような圓満を象徴、唄いあげている作品である。

描写が極めて精緻で筆のびやかさがすばらしい。形を捉えたデザイン力が活きている。

愛海詩の会 会員募集

「愛海詩の会」では作り手、使い手、各々の生活を文化的、豊かにするために、お互い素晴らしい輪を広げるよう、職人、作家の技と心を育み、会員一人一人の生活がうるおいあるものになりますよう、その文化的働きを推進しております。

北海道札幌での文化の基盤の1つである愛海詩の会、各々お説い下さいってご入会下さいませ。

(I) 一般会員は年会費3千円とし、会費相当の作品購入チケットをお受け取りいただけます。

また、会の発行する会報等を送付し、ギャラリー愛海詩の企画を知ることができます。

(II) 賛助会員は賛助金1口1万円以上で、特典は一般会員と同様です。

お問い合わせ、お申し込みはギャラリー愛海詩までお電話下さい (TEL 011 (613) 1112)。11:30～18:00。木曜13:00～18:00。月曜定休日。

お知らせ

「木曜而上」毎週木曜日、FMラジオカロス札幌、78.1MHzでギャラリー愛海詩の佐藤がパーソナリティーをしております。人と人、人と作品、人と文化、歴史、芸術との良き出会いを大切に、語ります。午前11時30分から午前11時54分の生放送、日曜日、同じ時間帯で生放送しております。サイマルラジオ放送で全国の人にも聞いていただけます。詳しくはラジオカロス札幌のホームページをご覧下さい。

空女の京薩摩・華薩摩

今日は幻とされた伝統の京薩摩の技法を復元し、現代の技術を活かし磁器の上に描く色絵細描「華薩摩（はなさま）」を考案。「華薩摩」は磁器である。赤絵細描から染付け、色絵細描、金欄手など多彩に描く絵付けの名手で数々のメディアでもとり上げられている。幻の焼き物と言われる京薩摩を現代に甦らせ、「華薩摩」とする。

幻の焼き物・京薩摩

京都では、粟田（あわた）焼として名高い三条粟田口の窯元で、明治から大正期にかけて、当時ヨーロッパ各国で大流行していた薩摩風の焼き物が生産され、「京薩摩」と呼ばれました。

わずか數十年の間だけ花開いた「京薩摩」は本薩摩と比べて華麗な色彩と精緻を極めた描線の美が特徴で、たちまち欧米人達を虜にし、一時期は生産量で本薩摩を凌ぐほどであったといいます。

その後、日本は急速に工業化を推進し、工芸から工業へ移り、人件費の高騰もあり、京薩摩は急速に衰退して行きました。

現在、本薩摩を知っていても、京薩摩が輸出用の焼き物であったため、京薩摩を知る人は多くありません。

その技術においても現在に沿ど伝えられておらず、幻の焼き物と呼ばれる所似となっています。